全
ハ 5
2132

門へ利5
歸2/32

明治[illegible]年四月廿四日
藤野湊氏寄贈

まことのみ

甲子

蘇室

枯野の一

晋子のかえし尾花の序み

藤野潔氏遺愛之記

蘇室久安述

旅ふ病ん夢は枯野をかけ廻る

また枯野踏ん殺す気もなしゆめやうつゝ

されどおこれさへ妄執なるべし風雅の上ふ死ん

身の道を切ふ切ふ悔まれし八日の

夜乃吟也云々十二月の申社刻ぞりふ改

元禄七年十月十二日なり

芭蕉翁文集之中俳諧教示の詞

予この風雅を芟蘆冬扇のおやこゝろ衆みちひく〳〵用る所なくたゞ釋阿西行の詞のみかり初めいひちらされあそこゝろなれやこゝろおほく後鳥羽上皇のかくせたまひしこゝらなまこゝろあるこゝろもうおくこゝろ詩こゝろやさしきすがた此そこゝろのこゝろはをもちこゝろ其ほそき一ふでをもてもとそびら古人のあや我南山大師の筆は道もまたこれおおぎいひく灯をうつしくわうのみ紫門の外おおくこゝろ風雅も

芭蕉談下巻

わが俳諧を前句の心我知らず我ぞ我はもち一句のうへ物ゝ感合次物の情をはなれ句ひきほひあれ

一正風傳ゝいふ事をおもふに晋子が拈尾花
の序ゟ憑もこゝろねたる身を竹冷ゟ似なる
うゑゟ風の吟行ゟ狂徳化ゟ正風の
師ゟ仰き仕るなりやあれど門人より正風
ゟ唱ふるともあるなり此傳翁の書給
ひしものゟく桃青書やあれど壮枝より
正風傳ゟ申さゝれくよろ〳〵さまで小枝
もまたくのなをもくべられざる壮枝

傳ゟ申さゝるこゝろなるべし
ろ〳〵翁傳を書なまふさもあるべし
風傳ゟも名付られく脳落なるべし
予が俳諧を蔓延燻冬扇のごくゝあるを
見てまことに尾花
一傳中ゟ翁の俳諧ゟ萬葉の意なりとある
翁ゟ釋阿西行の道ゟ入るゟあるをみば
萬葉の意ゟ甚誤なり其風雅乃
ゟ於ゑはくゝれるなり

一傳中ふ江上の一路ふあそぶやいふとあ
其ゝ向上なるべき我江上とこのれ〳〵音通
の誤ゝなれども又真如の月を観じ仏裏
北花をも尋ぬるゝあゝ皆禅家の
見性の事ふく達磨大師も九年の面壁を
なさまたくゝ甚ゝ我ゝきゝふ給ゝよう
風雅ゝ四時の風景ふ其身我養ふのゝ
あれぞ翁未期の病中までも枯野のさゝ
我ゝひゝしゝや坐禅入定やゝ仏乃

なごの名ゝ
ある人曰丈艸法師の青山白雲やゝさ
ゝ江ゝ幸い悟道なるゝ答ふ言語の俳
諧ふあるべしの俳諧なるやいふ秦より此
青山白雲の変いく来なりさればゞ俳諧
付肌の一句ゝうへりのふ感合をなる所理ゝ
をゝゝ言語絶をゝゝ禅家の問答ゝ
あるべゝ此青山白雲ゝ正秀への三十棒也
そゝをゝ我談をゝ見ゝく味ひなまふべゝ

芭蕉翁文集

許六ゟ離別の辞

水曽路を経く奮里へ帰れ人ゟ森川氏許六
をいふ古しへよ里風雅ゟ情あれ人ゟ後ゟ
笈をつけ草鞋ゟ足找いろゟ破笠ゟ霜露を
いとふ己ゟ心をせめく物の實を志れゟ我
よ為ゟ師ゟ恩ゟ有ほやゟの為ゟ長剣ゟ腰
ゟ為ゟ金令仕官ゟ望ゟ事ゟ為ゟ錦ゟ衣ゟ
ゟ為ゟ乗掛のうまゟ為ゟ鎗ゟもたせ歩行若

妓王風傳ゟ書元東北枝の書ゟ
ゟのゟおゟくゟ如ほゟぬ見れ
人ゟ見ゟまゟ次第ゟ

黨の黒き羽織のも
多く育ち俗吠人の
椎の花
う紀人
正風傳ふ上雲上より下土民までも
べきにあらず唐明の豪傑あり恥
なしとあらく北枝のわらひ
のごとくの
芭蕉談

曲翠問設句を取あつ絶集作
道の執心なれど
我上手なりや
よき歩行ならん
び我躰やいかに
撰集のこころなし
人々の風躰あり
来もうされがも
異なるやうなく

問

冬の日春秋日あり等あり越人凱集あるて設
句も数百ありなれども名ある句ありなれども
句集て出次第紀行句なきゆゑ不巻まで
もなくそを去来元北ごのぎみ應じて
今の一變正風なるべしいたるまで
ふ我心おのおのひく満足ぬ猿簑集おのおのこと
侍ちく満足ぬ猿簑集おのおのこと
書ちひて孤屋野坡ごのきちたる地名
旨ふまで世席も素龍ふゆづりなぎ
ばかり炭俵集ふあるる今度土芳半残ご生國の伊賀に
撰なきそうみあるて侍ぶやきて故猿簑
せんや撰ひうを侍ぶ彼地ふく集出次第
巻なくあそびしく巻ちくんふいうぞう
ふ叶ひ侍ちむ美濃の落梧ご瓜畠集ふくんを
思ひ立侍れぎて甚志とげぎくて身まうまあ
集ふ贈らんと思ひ侍ぶたる巻あるを此度曲翠亭
の巻あり彼是四五巻出べくと半残土芳まで
申置侍れぎ霞句を二百余もあるべく春の日

ほどの小冊なれど集は甚風躰を撰む
りのみや合體をもて我よしと
萬葉集をはじめ廿一代集の時の世の氣運ふ
まうせたる風躰也夫故古今新古今 [redacted] その
代々の風躰をあつめ次也然頃ろ御撰びなま
ハ甚風躰のはじまりばかりなる故也さるべたり
やうく集をも云べうじゃうれも歌のことはづきに
いふまでなれど俳諧やても同徹もあれべこそふ
真宝の玉海集の如き玉ふ見のまだ
来ぬ砂のまじりたる有雑無雑のあらめ書や
人の句〳〵ひろひ集めたなどやて我もの集作ら
極らぞ何を以く風躰やせむたゞ我も集作ら
や名聞の雅なる妙類あまたあれべこゆめく
真宝を誂誇をふあらば人のうへを以教をく
二三子に示さをまうぞ撰者是非分明ふ
ぜく曼珠よ〳〵夫をあきやいふぞうんや翁
曰甚人のたゞけ分にもおれ一位の句をよやも
へるもあるも夫をよ〳〵をおもへる句やうのぞ

たゝみなれど歌書をいぶせうう
うべ〳〵や前の日何ゆゑも冥〳〵かる
我家の俳諧み求め得ざれ所もゝむゝも
まてらごあと我口まねせんやうもなくば
甚故も古への歌人の哥書我手本にし〳〵歌詠
なれ人なり〳〵甚時代〳〵の風を考へ甚風を我
ものゝして歌よみたるやう思ふ夫故
一家をたてゝ古人のあやまりをまねぶ〳〵哥よみ
きれ人をいつまでも厩馬のごく生涯我歌よみ

勺数を好むへし
云云然れども其
前お初心ゝを
上達まて歌昏
又ハ物語等を
ろ〳〵と見ゝ〳〵書を
て見ゝ〳〵ものゝを意
読てハやもむ
きを得て勺数
ゝなりたらん
ゝろ〳〵くなふ
勺数を好む人
きめて狂を生
ゝ〳〵源氏雨夜
の物語ハ書ゝも
人の頭てうなふ
むすかれとの
教へある如く俳

人なり〳〵やはり我家の俳諧をまねぶやう
なはずかしきをも狂ふべきを初心ゝを過
まで哥書又ハ物語等ハいぶせきの書なりとも
見渡〳〵て家の風を失ふべし尤勺数を好むへ

以上
十月八日

舎羅謹書

野坡物語

正風傳ハ初心のうち勺数をこれみ夫より
姿情をわたり大山を越むふの驀へをもつ

諸く相撲取なども
いとゝく見苦しく
侍る

處を案次第に云々又ある時代くを
考へべくやうの歌の枕文章よりはじめて
ふみの筆ぐさにいたるまでくわしく味ひ見るべく
まことに我ら

この花盛の三
正風傳曰心高く姿卑く路ふみ入安く心ひくく姿
古人の胸中我見ずといふことあるべからず古人の書ふみ
もゝくもよく味ひ見るべし夫を先いそぎみるべし夫
勝心あるべからず卑路ふみ入安く勝心なく
まことの氣ありの我慢心の事ありてまことの氣の我
慢なき人ありや支を恥ず無知ふ欲ゆる婦女
児童ともある百人一首をとりねやうにもある

まして和のまことひ給ふ釋阿入道西行法師の
道をや千載集を後成卿の撰みて一所なる則自
判の加茂社歌合おもや沙弥釋阿や書ひしせ
新古今集い西行上人の歌専らなる集なりされば
これらの集を皆甚頃の風体備をて感深し
註八代集抄季吟法印の著書おもく和の師
なる宗匠なれば俳諧おもよろしくある註釋なり
山家集を西行上人の歌集なる甚角なる
得ぐ和の骨髄おもしるしあるを世の

宗匠達そうそんだ俳諧あれどこうばし 此内雅詞
条を欲心あるべし考ふべし又ひくなやく
ぞあるたゞ無欲ある故ぬ静なり歌も
あるぞ心まことなる古人の胸中をうごふ事あ
なるぞなる傳中ぬ向上一路ぬあるべし
心裏の花を尋ね真如の月を観るべきなり
丈艸法師の青山白雲やいふ事皆欲をそる
方便なる欲心捨なるうへぬおゆる真如乃

月心裏の花青山白雲向上の一路やうのもの
なり禅ふまでもなく執着の色備欲ふまで別に
捨るやうのものなり不義なくむさぼらぬ
ふるまひ彩ら是ほどの事ぞ
神國のあるじともあらめやも世をはばかる俗人
婦女子ふまで皆よく此事なれど西行
またいそぐべからん人を深く仏得でやあるべき
翁これを憐み給ひゆゑ末期までら枯野の夢
みるが風雅をこのむ生涯山野を樂しみ

ぞなどふまでこれ是我學ふべきを慕ふべし

芭蕉談

戀句の所ふ翁曰

連歌の上をかくいふも恐ありふ似もれどもそれ
連歌の事ふく俳諧の上ふあらねど背き奉れ
ふもおよばず然ふも我古人の罪人なる事をま
ぬかれぞふ後學の作ふようんことを思ひ
待るのみ云
云

同書ふ

古六悪の句数定らず数後二句以上九句となる予一句ふ捨る云云祖師気魄の大なること此章を以ふ知なり

格ハ中古ノ中昔ハ千載集 新古今ノ頃ヨリ 俳諧ヨリ連歌ヲ
輕メ〳〵去キラヒヨリ安クアリ〳〵アル我コヽロヲタヾヘテ
格アルモナシヤウヲ知ルモノ〳〵誤ヲナラベ〳〵
ウタ〳〵ヤ
ハヽ膳ヨリハヤシ
この九一段ヤ翁の俳諧ヲ見〳〵ヨリ〳〵
ふるの掃なきづこそ〳〵飛鳥のあやなき如くなく
蕉門ヲウヾあげヲ所ヲ何ヲ格のいやしき
我用ひんや是蕉門の蕉門ヤヲ所ヲれバ能々

味ひ〳〵ヲ記事ヲ〳〵言語のおよぶやうも
ありぬべきヲ
傳ふ格の出入をいふのみにてきひざることを
といふなり

是蕉門の無格ハ翁在世ノ時ヤヲも太來九兆ぶり
ざる處獨丈草曼ヲ得たる故翁遷化の後又それを
人ヲ〳〵ハ蕉門の無格ヲ得ざる故ニ
無格調詞和平
蕉風無格ヲれバ春の句ヲ秋の句附ル〳〵ヲきめれバ
よろ〳〵無格ハ只作のまゝにき為ヲり調詞の和平ヲ
らん事ヲ要ヤ

蕉風無格調詞和平附意の全躰に意無きうち物を
感激を黙々ゝゝて悟入せん民化の一助なるへし

かゝる聖の四
もゝゝ日禅僧来ゝゝ予ごかれ野を見ゝゝく
笑ふゝゝゝゝ愚僧も俳諧をこのみゝゝあを
翁の真面目を禅心なを尾花の序ゟ開禅
の法師ゟあふれなまひとゝもあきらかに
向上一路心裏の花真如の月青山白雲等の意なきも
もゝゝ如くいひなゝゝ只山水の楽ゝみをもねふ書
ゝゝの大なるひなたぼこ予のいゝゝもつゝ
き禅道ゟ我ゟ学ぶゟゝゟみ仏問答ゝゝれ

佛法も末期の一念大切なるよし兼ねもうしてゐ
甚未期みいるより夢いこれ野をかけまはるかいてゐ
みてる大涅槃み入やいふものなるべきや僧がいそく
是みちてこころはるばるー中笑ふもれども此久しき
中ー月前を禅心もて来るべき甚哥も何とかく
あれどー徳をうしなひてこそんまして西行
釋阿の佛心なれりのを釋阿西行の道や書く禅
心なきこころもをまもらぬ侍るべー手いそく甚こと
是ふ似く甚那なる至釋阿西行の歌ふまふふくある

風雅のおもむきふなるべーなやへぐ萬葉を慕よ
人いまの古へのはまをうなひ古今をおもふ人ハ
紀氏のあや我もてふうたみおおやう
みおをもおもひもちを志ばるあるを近き俳諧おも
猿うのを好むものをはるみの炭俵をこのむもおの炭
俵の調なるみ風雅のおもむきふあれぐ至我
いよよ歌ふ僧曰いばるもせー佛心ある人を佛
心なれやみいよよ本旨といひうー手云
紫門の辞ふ君子多能を恥やいまれーめー

十三朝紀聞
後光明天皇承
應二年癸巳九
月之条曰
松永貞徳翁字
長頭丸弾正久
秀之姪善和歌
受古今於幽斎
藤孝又工連歌
初立花開祖隠
其側後應乾然
親王之徴徒方
廣南池田里起
恩堂若九屋設
吟花廊于堂屋
之間堂内安于
昂貞墳法華経
置上宮太子善
提達尊人九尊

甚誹歌を奉らひいたく賞しまひく俳諧
花の本の称号を賜るなりわが蕉翁乃
俳諧ハ隠者の幽情閑雅の風致をもねがせる
なれバからぐ〳〵き法式などよろこばざり
やごとなき御方のこゝろを找るもあれ
やすもおぼ〳〵しくて花のもやうにいろ美称
をもまねぶなるべし
本旨を思へでいみじく貞徳師ふるきよしある
称号みてそ里村氏世々ゝ来るやう

之定家紫式部
恵像自号柿園
法皇嘗得其諸
歌大奇之賜以
称曰俳諧花本
感激創斯道軌
則為一書名御
傘故世推為諸
歌始祖云遺書
有載恩記等

翁がむかし隠逸の野風をおもひ萬葉集のうなり
かな岡の此むかしを尾ゝ推まうでゝはなつの
陰ゝ生むかしを推の木もあるとぞ幻住庵の記の奥
ゝ先なのむ推の木もあるとぞ幻住庵の記の奥
蕉門ゝも推でゝもをしくまし
似法をしく本意なきまし

推でゝもゝゝ捨ゝ名をゝもはゝでこれ野の夢

見られまゝ経俳師ゝのそび

元治元年晩春

芭蕉談小書記
ハ焼捨ハと書
て後ハ句の
姿ハ青柳の一
章を開記ち
書ー又の書翰
ハ俳諧示教の
書あり云々
ハ心定まらざる所明らかに
見えたり師ハ
き後愚人の敬
をうらふ人
後世とても多
うべし
蕉門附句の上
格なき支ハ句
響移位面影ま

正風傳 此書ハ師蒼虬蘭更宗匠より正風傳ハ此書を以の名決めなて流布せらるの乱書豆落なる所多し

時ハ邪路ハそらるる格ー入格を出ざる時ハ世ばー格ハ今ぐ
格を出ざる時ハ世ばー格ハ今ぐ
格を出ざる格ー入格を出ざ始て自在
を得るべし

一詩歌文章を味ひくこころを江上の一路ハ遊び
作を四海ハめぐらふべし

無門関 乾峯一路 須曰
未」舉」歩時先已到 未」動」舌時先說了
直饒 著 著在 機先更須」知」有 向上竅

附肌の優なる
ちをえらぶ
ハ千歳二
ハ立つのもの
皆句ちなる
うへの表徳ー
ー是を用ひ
句を作らん
思ハ心の念着ち
をうしなふ風
雅心ち句を
生ー理ハ
ち所ち

江上之江字蓋以江向音通誤歟

一千歳不易一時流行

一他門の句を彩色の如く芭蕉流の句ハ墨画
のごとく折ふれ彩色なるもあるべし
他門ハこうはものくハ
一名人を地をよくやふ
ありき不ハ妙あり
ー句み所
一古人の跡をふまず古人のもとめたる所

千歳不易を時
おそれ一時
の流行なりと
丈艸つゝ但
丈草法師が翁
よるべ人品の
あらわれる所
ありてなり
されど翁も丈
草法師が久し
く我門に遊ぶ
人多かりへ
よりそれ
支あるなり

を求むべし

一等類作例吟味をとげべし

一古書撰集ハ眼をさらすべし

一野深川ひさご猿蓑の炭俵翁の
一そを我翁の風流を學ぶ輩ハ先鶴のあゆみの
百韻より歌冬より日あし
文熟覧をべし句の
一初心のうちハ句數をこのむべし夫より姿情をわろ
ち大山を越向ふの嶺へおもなる所を案ずべし六
尺を越んとおもふものそまぬふ七尺をのぞむ
べしされば高きを軒路ハ入安くこゝろ低きを
古人の胸中浅きを以下のもれなるを誤れる俗談平語と
一俳諧ハ中ほどの世俗の翁ハ俗談平語をたゞ
のみをおぼえたるやうなれど
をしらへたる事あるを紀事いふをハ俳諧やうなれど
云ともなくこれ
用ひるより何
そ俗談平語と
たゞのごとく
よるべ下土民までもおもひ
らんやこれ俗
談平語より知
らぬもの書
入なるべし

翁の句々を見
侍るべ俳諧
勿論雅詞詩
文の熟字も字
音も万葉詞
何をきらはず
云ともなくこれ
用ひるより何
そ俗談平語と
たゞのごとく
よるべ下土民までもおもひ
らんやこれ俗
談平語より知
らぬもの書
入なるべし

一段句の次ハ青柳の小雨ハれたるがごとく折々微風

あやをりもをり一附方いろを月の夜おうなのぞ
こふ〳〵ありほの色るゞ如く竹村を色ぐ〳〵琴聲を
きくがこと〳〵情心裏の花をも尋ね真如の月をも
観ぜべ〳〵口を飛流の我國にてふをを第一なる國
歌にてふをを一てふをは專要なる味ひ一字もそまたなる事ありを
なり則やらんそけるこそけ故先哲の作を
きたる結ひく
詞の玉緒ふ悉
〳〵句切字
なり賞やあ
うや淋〳〵そ
何もそその如

此奥芭蕉翁のおもおれぐ人もおもれるものもれ
ぞこれを畧きてぬ

元禄七年春　北枝

ゐる得ん意
のこれる物
ハ皆切字ふ〳〵
四十七字倶ふ
切字なる〳〵
一字の置様ふ
こゝゆき戻

こゝゆる有
こ雅詞の上ふ

附言

明らなる〳〵
予黒谷の一枚中むら〳〵以来風雅を
起請文の磐
をよみ〳〵
はき捨〳〵ふ
ふ吹迷ふの葉大志ある人のこゝろ法
うあこゝろを
伴信友翁をゐもをこゝ多一うをぬる
かゝるこゝゆき

この正風傳を法ふ記〳〵ぬるも志れる華
人を志をこむなれぐもこぬ人のをこ多一の
まで因みふこゝふ擧れふなん

蘇室

出家まゝぬ甚誠意の
いなる時なくて空〳〵風雅
の事を甚重く佛道の
ふかきを
ふかく引立られ
なり真面目
自らの詠吟を
座右に書つけ
く一ケ月ばかり
諫調せられ
ゝ聞侍りぬ
翁も羇旅中
故事をもて
一名人の
よく思ひ感
ありきものを

おもはりのまゝにて故ふかき
元政法師のごときを一流の法則もあるまじやく
佛法ふかき人やいふ
如くよくもあるべく山水花鳥ふ對〳〵絶情
をのをられもあれ故みちの名人なるべく佛心の
往々なる樂天の詩乃如くをめをち中むべ〳〵の
風雅のはまやいかむ甚徳をうしなふべく正風
傳なを法〳〵禪心を真面目のごとく唱へ

かるを却てこゝろを甚せまくいふべく士朗の
漢學盛業ふあるべく佛の事ふかくのをられ
るを風雅ふ業をうしなはやむべく禪心を
真面目やなれば蒼虬梅室卓池の宗匠
ものよりを以下みだりに棗門ふ縄をはる風雅のく
もみやいふべくふやや嗚呼枯野の夢後世
の佛法ふくふれを名利をはなれ事高しや
いかん　皇國の風雅の枝葉やいふべくも外邦
のおよぶ所ふあらばこれを去るべく心なくか

みゝ山水幽静の地ゟあそび飄なかうん
むみもんそ真率の味やいそむ歟

蘇室再記

枯野集かきそへく芭蕉翁を祭る辞

俳祖桃青翁の御霊ゟ申〻侍ゟ

古池や蛙とびこむ水の音

断除嗜欲想永徹天機障身居萬物中心在萬物上

去ぐゝゟ花のうへもる月夜哉

天下元無事勞々我有心相携沙上語山月二更深

去ぐゝゟをなる村紅葉

丈草

丈草法師秀逸ゟ
の附句ゟゝ言
詞ゟのへなき御膳がよりを松ぜの
言外の意味謂
坐忘ゟり芭蕉
談ゟ翁の詞ゟ

幻迹有二本来一達観無二古今一長嘯人不聞山風吹二蘿襟一

申尺〻難〻と
有點〻〻ある
〻〻芭蕉談ず人不」能」外」事事不」能」外」理二陣佛所名吾儒寧有此
世間を以〻俳諧
ず遊ず物〻風雅
を以〻俳諧ず遊
ず物〻ずる時
俳無心所着ず道心
遊び給〻有り
無心所着ず道心
ゆえ元政上人の
歌の如く文章佛
の俳諧は如〻第
一義の場ゆ〻
よ〻〻〻近時
俗禪多く殊ず
まぎれ生一風

枯枝一かくのごとき秋の暮
空〻〻〻幽ず面浅きく夜り蚊
苟能深積累豈患無高譽如何世中人甘心鐵爐歩
沙を這ふいぞ〻の中も
ゆえれを人のいひ出をそなく
誓首觀音宴坐寶石忽々夢中應我空寂觀音不來
我亦不往水在盤中月在天上
もろ〻のこころ柳ずまゝ次べく

雅心ハ花鳥ず
こころを労ス
る所有心なり
〻〻〻ゆえ
俗心ずまぎれ
所なきゆえ世
間を以て俳諧ず名月や池をめぐりて
遊ずものハ是
俗心雑心なり
風雅心なを以
下ハ語るべく
ハゝ事ずくどぜつのみぞ〻根芥子の
是中もひとを一歳十匹衣一日兩盂飯真樂苟不」存衣食爲二心患一
先ずごとくもひとり也爾是大きらや蚊の出〻舞ふなぼ〻月
ゆえ〻〻狂者盆花浮」紅篆烟繚」青無」問無」咎如意自横點瑟既希
の意ありと云来

のようなこれ
一代の秀句
狂者よく詠歌
の典のこと也

昭琴不」鼓此間有」曲可」歌可」舞

まづ〳〵ふ二日の月はちれ

こぐ〳〵の地ふも落さぬ時もれ

の句許も作や自然と

妻よぶ雉のうらやましく

風姿の高きも山家集の意

馬ふ寝〳〵残夢月遠一葦の煙ハ牡牧ニ詩の熟字

這虫ト〳〵康火屋ニ志てこの蚤の多ハ萬葉集の詞

腫物ニ佐ル柳の下ひやゝかなるハ伊勢物語小藤の

志ゐひ三尺六寸ぞうち出ぬべく此外七部の句々

炭俵ふいまだ〳〵雅詞も數のこだにもなく〳〵まと

の古ふ球面影ふもあ〳〵作ニなまふ博識ふ

聞情ハ當世ふ通じ〳〵知ニ給ふぬ所なきふ

君入門の人ふを〳〵ふ曰

我ふ似ふぬ〳〵ふ真隶爪

佐ふぞ後世俗談平話をたゝふのみや觸流〳〵俳諧

地ふも俗々〳〵なるふ君ふ語ふ後の世ふあやまち成ふ

君生涯羈旅ふ杜甫詩集山家集観音経をいふ〳〵

心地ハ經の無我觀達〳〵情ヲ山家集ヤ杜立郎を
胸ヤきたる笈中の遺物ハ文草太來のようこび
いくばくもなれど〳〵則情實ひとやいつぐさるを
北枝てふの已ゞ閻記よるを出る所をちぎる〳〵ハ書
あ〳〵正風傳やいふるより以來實我おもふのも
悟道見性ハうおよるゝ佛家の如く〳〵情をねもふ
もれを實我忘ゝ枝葉ハをれ經の無やひる
ものを實なる詩歌ハ情をはるハ情實ひとは
あ〳〵人世閑を樂しむの教をあ〳〵はゝやおも

君ゞ誤ゝまゝる後生のあやまるの
金籠鎖鸚鵡山木縱班鳩巧拙知誰是天機不自由
君幻住庵のおれ〳〵みゝ
小雨閉空齋青々竹映堦道人終日靜一枕到無懷
此意旨あるまたるまゝ〳〵續扶桑隱逸傳ハ入
ちぐ〳〵何とゝ隱逸ハ唯佛家のゝみあ〳〵市中ハ有る
名を隱ゝ我隱逸ゝのをゝへなきかを後世稱良ひ
やゝ其情實を行ひなるをあ〳〵も天然の人品のみ是君ゞ
誤ゝ後の世ゝあやまるの君ゞ頃ゝ深川の菴滋〳〵

水流縦急境常静花落雖頻意自閑
此意旨あるべく楽しみなるべく教示あるべく花々舗
深川の時の如くおひ君のあるべく残るべくのべく
繁華の場所を好める景色を君が誤なるか後世の
あやまるべく
君五十年禁戒のため閉関の説を自書〳〵
葦一やひさご館おるべく門の垣
やあるも風雅の為めも禁戒罕〳〵
枯野の夢ふ只山水の真致を娯楽むべく蕉門の

俳諧なるべくや〳〵言挙をするも風雅心の禅
心う唯ふ藾室ぶ俳心ろこれを御霊の御前ふ質次

元治元年十月十二日

藾室久安謹書

風雅心

推こゝもかゝれたる心ばへのく
この発句の姿を掌に見るごとく
千載集の序に曰久しく此道を学び深く其心を
悟る輩に法をあきらめきわまる中に松花庵ふの
芭蕉の袂ふれる物皆を模へるあやまちを
いふおろか
附意
もとよりそゝぬ時のなきこゝろを
蕉門の附意を悟るに此心萬物一体
ちうの理を得るのこゝろを作を立名伐このむ
事是私已のいまこゝろを忘れうるまき故なく
詩歌をよむ心得
こゝろ〳〵詩をもつ句や姿をまねび形迹や
法ひかゝ〳〵ものうるはるものへ
閑寂を文字のうへ〳〵尋めゝ拙風雅心
則閑寂